
星野潤一郎が包丁で刺された時

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星野潤一郎が包丁で刺された時

【Nコード】

N0886Y

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

バンドオンザラン形式。書き足すかもわかりません。

株式会社パイナップル・スペシャルの社員、星野潤一郎が包丁で刺されたとき、ギャグ漫画家、山岡喜八郎はうどん屋でうどんを食べていた。きつねうどんだ。彼は麺類が大好きだった。

外では雨が激しく降っている。

ざあああああああ。

喜八郎は、から揚げも注文し、うどんに乗せた。「うん。旨い」

星野潤一郎が刺された原因は三つ考えられる。

？無防備過ぎた。星野は自由人でドアに鍵をかけないで寝ていた。

？悪い女遊びをし過ぎた。サンマタヨンマタは当たり前。ヤクザの女に手を出すこともあった。

？油断していた。

やんちゃなのに無防備というのはおかしいかもわからん。やんちゃなやつはだいたいガードを固める。敵が多いからだ。しかし、星野は、楽観的だった。まさか刺されるまではないだろうと油断していたのだ。

星野潤一郎の妹、星野星絵は、「ドーナッツ野郎」という店でアルバイトをしていた。もう十年もしている。その店は本社に正社員を置き、現場は社員の店長と多数のアルバイト店員で回っていた。

生活は何とかできる。しかし、貧困生活だった。

「ああ。回らないお寿司屋さんに行きたいなあ」星絵はカップめんをずるずるすすった。月がかわいそうでおいおい泣いてる。非正規は現在、1700万人いる。三人に一人が非正規だ。1985年の段階では600万人だった。

システム変革……必要である。最低賃金を1200円にしなければならぬ。

ざあああああああ。

「ドーナッツ野郎」のドーナッツは確かに旨い。しかし、それも

時間の問題だろう。このままでは確実に品質は落ちる。人件費が少なすぎるのだ。

法人税を少なくすればいいのにな。

星絵は、ある日、首吊り自殺をしてしまったた。あまりに貧困なので、苦しくなってしまうたのだ。

「別れましょう」

「そんな華子！ やめて、そういうこと言うの！」

「だって、豆ちゃん、つまないんだもん……」

くそ。はつきり言うやつだなあ。美人じゃなければ、殴ってる。

まあ、しかし、確かにオレといても、あまり面白くない。オレはアルバイトである。月収が十二万円だ。温泉に連れていったり、寿司屋に連れていったりできない。

小説は書いてる。しかし、すばる文学賞に落選した。なかなか厳しい世界である。当たれば、でかいが、なかなか当たらん。

オレと華子は喫茶店を出た。

まったくどうすりやいいのか、さっぱりわからん。

華子と別れ、土手に座って、川を眺める。夕日が沈む。カラスがかあかあ鳴く。

石を投げる。

「はあ……もう自殺しようかな。疲れた」

まったく方向性が見えん。アルバイトなんて続けたって、貧困だし、小説はあまりに倍率が高くて、いつなれるかわからん。なれんかもしれん。

となると、自殺しか道がない。

「はあ。もうめんどくさい。飛び込むか」

オレはシャツとズボンとパンツを脱いだ。

「うう。寒い」

両腕を抱えて、ふるふる震える。

ちびっこが寄ってきたので、しっしつと追い払う。

「溺死する前に凍死するな」

オレはこんなバカしててもいやあないと思い、服を着て土手をのぼった。

土手の上の道を歩いていたら、向こうから、ロリ華が歩いて来る。ロリ華は華子の妹だ。「学校の帰りかい」「豆ちゃん。仕事ないの」「休みだよ」

ロリ華はオレンジ色に染まって美しい。華子と顔が似てるから好みといえば好みだ。ただまあまだ中学生だから手は出さないわけである。

「豆ちゃんは正社員にならないの」

「プロ作家になりたいんだよ」

「ふうん」

カラスがかあかあ鳴く。影が伸びる。

「ロリ華は将来何になりたいんだよ」

「えへへへー。お嫁さん」

かわいい回答である。呑気なもんだ。

しかしまあこの呑気さを少しは見習わないといけないかも。

向こうから、ヤンキーが歩いて来る。

「豆ちゃん。怖い」

「大丈夫だよ。腕力だけが頼りの頭の抜けたやつらさ」

ヤンキーがいきなりロリ華の腕を掴んだ。オレはがたがた震えた。2メートル近くある。殴られたら死ぬ。しかも、ヤンキーは五人もいる。

「豆ちゃん。助けて!」「うぬぬぬぬ」

オレはあまりしたくなかったが、日本刀でばさりとヤンキーを斬った。「うぎやああああああ」

二メートルある巨体ヤンキーはぱたりと道に倒れた。赤く染まる道。他のヤンキーは、オレが日本刀を向けると、怖がって逃げ出した。

「ロリ華。大丈夫かい」

「う、うん」

ロリ華は目を白黒させてる。オレは邪魔なので日本刀を放り投げた。

おかんとワイドショーを見ていて、なかなか勉強になった。おかさんは、まあオレより法律に詳しいから、いろいろ聞いた。

現在、週に30時間以上働くと、厚生年金と社会保険が会社でつく和法律であるらしい。知らなかった。アルバイトは生きるのに必死で法律に疎い。オレは現在、完全自腹で、国民健保と国民年金に加入している。厚生年金・社会保険と国民健保・国民年金と何が違うかというと、会社に勤務してる人とそうでない人、長時間労働の人、短時間労働の人の違い。厚生年金・社会保険だと、月に10500円で済む。半分を会社が出してくれる。国民健保・国民年金は合わせて24000円。圧倒的に前者が得。

ただ厚生年金と社会保険を出すと潰れちゃう会社もあるもんで、実際はやってないところが多い。そういう場合は、法人税を減らせればいい。ただ、理由はよくわからないが、国はなかなか法人税を減らそうとしない。確かに、いろいろ問題はあ。天下り先の公益法人の法人税はバンバンとりたい気がする。てか、天下り自体がいらんか。資格を発行する、公益法人。受講料がめっちゃ高い。一年に一回とか受講がある(数年に一回でよし。一年くらいで忘れんという意見多い)受講の際買わされるテキストが無用で高い。あと、ある天下り先の公益法人の、余剰金1000万円。使途不明金3億8000万円。要するに、法人税をすべて減税すると、こういう悪いやつらまでおいしい思いをしてしまう。とはいえ、法人税を減税しないと、パートさんアルバイトくんは厚生年金・社会保険を出せない。難しいところだ。

それが法改正されると、厚生年金と社会保険を得るのに、労働時間が週に20時間でいいみたい。雇用保険はもともとが20時間。オレの場合、塾とスーパを合わせ、今は仕事が減って30時間

行かないけど、一時期は余裕で行ってた。一日13時間とかあったものな。しかし、掛け持ちということで、室長に尋ねても反応が悪く、厚生年金と社会保険が下りなかった記憶がある。雇用保険でさえ下りなかった。

なぜ、スーパーと塾があまり今までそれをせえへんかったかという、おばちゃんと学生が多いからだと思う。おばちゃんは旦那さんの扶養に入れるし、学生は親がいる。

しかし、20時間となると、スーパーを一日4時間にすれば、いける。

とはいえ、繰り返しになるが、それやると、うちの会社潰れてしまいかも。徹底した低価格である。現段階でぎりぎりやってる。正社員も給料ごつつ安い。だから、法人税を減らせばいい。天下りもなくす。いらん公益法人はどんどん潰す。

まあこういうことを考えるようになったのは、アルバイトが10年以上続いているからかな。バイトを始めて数年は気にしてなかった。非正規は1985年の段階で600万人。九人に一人。今は、1700万人。三人に一人。すばるは1300人。電撃は5000人。いやでも考える。

消費税増税も少し疑問だな。社会保険も厚生年金も雇用保険もないのに、なぜ商品が高く買わないといけないのか意味がわからん。

大学の同窓会パーティのお知らせの手紙。会費が5000円。連れが文芸フリマに参加しよう。東京までの交通費はどうすんねんと。月に5000円貯めればいいと。

オレの月収9万円。なめてんのか大学事務局。正社員を基準に書くんじゃない。今は、非正規労働者が労働人口の三分の一いるんだぞ。卒業生でも、概算すりや三分の一が貧困なんだ。それを考えて会費を決めるよ。ちなみに、連れは正社員。経済的感覚がまるで違う。オレたち非正規は、趣味に大金かけられない。生活すらまともにできてない。

ただ文句もばかりも言うてねん。彼らは善意でやってるだけだ。別にオレに対し、大学事務局はパーティーに誘う義務はないし、連れがフリマに誘う義務もない。というより、断交してしまったので元連れというね……。

しかし、つらい！ しんどい！ 陰鬱！

現在、所持金が4000円。

原付が故障したので、給料日までにバス代5000円。

わかんない。うひゃ。むひゃ。まひゃひやはひゃ。壊れてくる。
 まひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。

何をしてほしいんだ、世間は。

アルバイトをやめて、小説家になってほしいのか。

だから、新人賞に投稿してやった。落選だった。

意味がわからない。小説家になつてほしくないのか。アルバイトをしてほしいのか。だったら、賃金をきちんと超越せよ。やってほしいならば。

なぜ生きてるのか、さっぱりわからない。

とはいえ、死ぬわけにはいかん。小説を書かないといけない。死んだら書けなくなる。意味はよくわかんないが、身体が小説を書くことを望んでる。自然に指が動く。大脳とあまり関係ない。脊髄から。条件反射的な。パソコンを見ると考えなしに打ってしまう。熱いものを触って手を離すように。

ひとまず、おかに5000円借りよう。タバコ代が給料日まで4000円するからなあ。バス代だけ借りてもどうにもならない。給料日になったらすぐに利子つきで返し、原付をバイク屋に持つてく。

仕事に行かないならバスも原付もいらんが。なぜか会社から交通費は出ず。

「ただまあ、仕事に行かないと、次の給料はなく、原付を直せない。だから繰り返し返しになるけど、仕事がないなら原付いらんねん！！」

会社の対応の悪さにイライラする。労働者をなめてるな。前途多難。いったいどうすればいいのか。意味不明……。

こんなとき、やはり読書が救いになったりしてる。

原付が故障する前に、ブックオフで400円で買った、バルザックの「ゴリオ爺さん」。貧困がひとつのテーマになってる。共感性がある。

タミオの音楽もいい。優しい。弱肉強食の世の中にぴったり。

やはり、消費というのは大事だな。生産だけでは壊れる。過労自殺する。

オレの勤務する塾の生徒で、松田珍平というやつがいる。みんなからは、ちんぴらと呼ばれていた。やくざと関係を持ってると思われる。素行が、ごつつ悪い。

まあその悪さ加減たるや、いやはや。

珍平は、学校の帰り道、いい女を発見した。ミニスカートはいて、ごつつセクシー。珍平は一発で気に入った。さっそく声をかける。

「お姉さん。いい尻してますね」

女は怪訝そうな顔つきをする。何だ、このガキは、といった感じだ。

「ボインですね」

珍平はなおも攻める。

珍平は、実は、みんながどういう想像をしていたかは知らないが、メタボリックである。ゆえに、女性も、ちょっとうざくなってきた。イケ面に声をかけられるなら嬉しいが、相手がメタボリックなら、うざいだけだ。

珍平は奥の手を出した。

「す、すごい」

珍平はポケットから札束を出し、見せびらかした。おねえさんの目はハートになってる。

「よこしな!」

「あつつき合ってくれないとやだよ」

おねえさんは珍平から札束を奪いとった。

「すんげえ。あれえ」

おねえさんが札束を数えると、上の一枚以外は全部、新聞紙を切ったものだった。

「!!!!」

「おねえさん。つき合ってください！」

おねえさんは、珍平を殴り、一万円札だけ取って立ち去った。

「うっくしょ」

珍平は悔しくて悔しくてならない。カネさえあれば女なんていちころなのにな……。

珍平は二丁目にあるやくざの事務所に向かった。仕事をしないと
お力ネは手に入らない。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0886y/>

星野潤一郎が包丁で刺された時

2011年10月31日11時01分発行